アート・ツーリズムにもとづく発展の可能性と課題
—直島の事例から

フンク　カロリン[*1]・大　塚　寛　子[*2]・張　　楠[*3]

[*1]広島大学大学院総合科学研究科
[*2]広島大学大学院総合科学研究科・卒業生（修士）
[*3]広島大学大学院総合科学研究科・大学院生

Chances and problems of development based on art tourism: from the example of Naoshima

Carolin FUNCK[*1], Hiroko OTSUKA[*2], Nan CHANG[*3]

[*1]Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University
[*2]Graduated, Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University
[*3]Graduate Student, Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract

The town of Naoshima on Naoshima Island (Kagawa Prefecture) has received attention as a site of art tourism. Art tourism is increasingly seen as a tool for regional development, as it is expected to attract new types of tourists especially from the so-called creative classes and allows for active participation of local citizens in the development process.

This paper aims to examine art tourism in Naoshima from two aspects. On the one hand, it investigates the characteristics of tourists, their image of Naoshima and their interest in art and architecture. On the other hand, it analyses the activities and opinions of actors in the tourism industry. A questionnaire was conducted in November 2012 and received responses from 255 tourists and 40 actors in the tourism industry. Additionally, interviews were conducted with Naoshima Tourism Association and Benesse Art Site, the company that developed art tourism in Naoshima.

It was found that tourists to Naoshima include many women from the urban areas of Kanto and Kansai and many young people. Although art is their most important aim to visit Naoshima, it is not so important as a general travel motive. They express a general interest in art and architecture mainly through watching TV programs or searching information on the Internet on that subject, rather than visiting museums frequently. Especially younger visitors enjoy to stroll around the island with their friends, so art seems to be a secondary motive. It can be concluded tourists to Naoshima are not art specialists or specialized culture tourists; however, art tourism definitely has contributed to a very diversified visitor structure different from other locations in the Seto Inland Sea, like Miyajima.

For actors in the tourism industry, it was found that many moved to Naoshima in the 21st century, especially after the opening of the Chichu Art Museum. In consequence, many new restaurants and accommodation facilities opened after 2004. They offer only limited services, and very few of them engage actively in attracting international visitors. However, although their service is basic, they make up for it through strong personal engagement. Very few have connections to the Benesse art site or show a strong interest in art. As a conclusion, rather than art itself, it is the success of art tourism that draws new visitors and actors in the tourism industry to Naoshima.

１．はじめに

先進国の観光地をとりまく環境は、近年、劇的な変化に直面している。その変化は先進国で進んでいる高齢化・人口減少、観光のさらなるグローバル化、観光行動の多様化と特殊化、消費者タイプの解体という、４つの現象にまとめられる。特に消費者タイプの解体は、観光の場合、観光者が様々な観光形態を求めることにより、エコツーリズムのような、小規模で「新しい観光」と言われる現象を生み出した。日本政府も2007年の観光立国推進基本計画において、「政府が総合的かつ計画的に講ずべき政策」の1つとしてニューツーリズムの創出と推進をあげている（国土交通省2007: 52）。その中でアート・ツーリズム（またはアート観光など）が今後の経済活動に重要な役割を果たすとされている創造的階層（Creative Class）の旅行形態として（竹田・陳2012:78）、または地域住民の積極的な関わりを可能とする地域活性化手段として（Klien 2010: 519）期待されている。

先行研究のまとめ（3. を参照）からも明らかになるように、現在日本で最もアート・ツーリズムの取り組みとして注目を浴びているのは香川県直島町とその周辺で開かれる瀬戸内国際芸術祭（2010年、2013年開催）である。

そこで本研究は直島におけるアート・ツーリズムに注目し、観光者、住民、または観光産業関係者の特徴と彼らが抱く直島に対する考えを調べる。また、訪れている観光者は、普段どの程度アートに関心を持っているのか、一般観光者層と異なるのか、アート・ツーリズムは観光産業にどのような効果をもたらしたのか明らかにする。その上で、新しい観光者層を生む現象として、地域活性化に貢献する現象としてアート・ツーリズムを評価する。

２．研究対象と方法

1）研究対象

直島では離島の独特な文化や景観を残しながら、現代美術という新しい観点から開発が行われている。島は現在、北部の産業エリア、中心部の生活・教育エリア、南部の文化・リゾートエリアに別れている（古川2010：93）。瀬戸内海交通の要衝を占めている直島は海運業と製塩業、そして大正時代から製塩業で生計を立てていた。経済発展をめざし、1917年に三菱鉱業（現在の三菱マテリアル）の精錬所を北部に誘致し、経済状況が一気に好転したが、煙害により環境問題が深刻になった（古川2010:93）。また、銅の国際価額低下など、銅市場の変化も影響し、精錬場の労働者数とともに直島の人口も1970年代から減少しはじめた。1990年代に隣の豊島で発生した産業廃棄物の不法投棄問題がきっかけとなり、直島北部の三菱マテリアルはリサイクル事業を開始し、2002年に循環型社会のモデル地域を目指す「エコアイランドなおしまプラン」と「環境の町宣言」に繋がった。

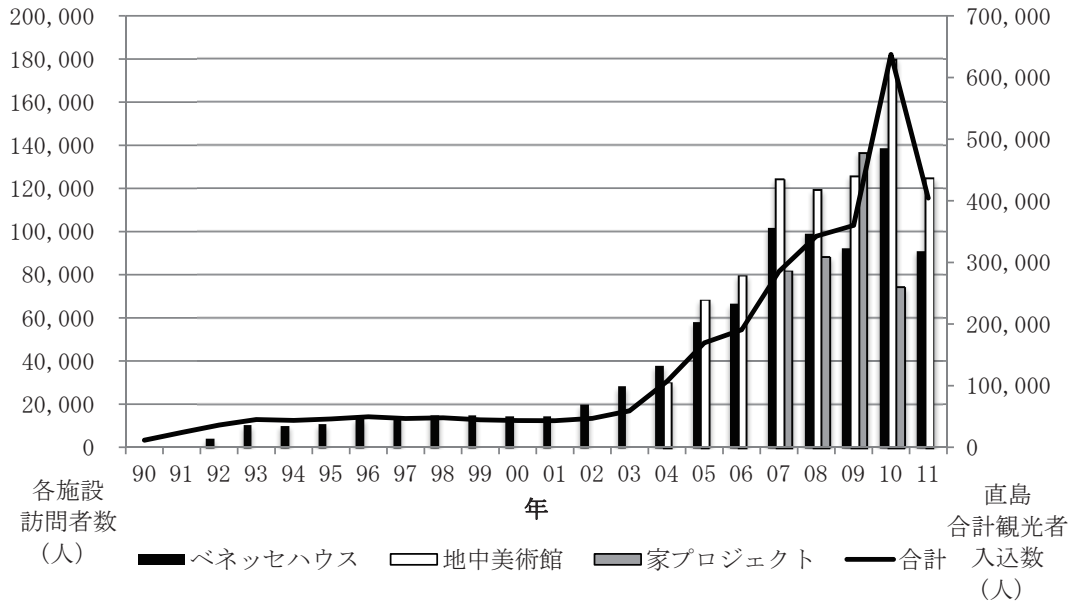
直島町は1960年代にすでに島の南部を観光事業の場として位置づけ、藤田観光が1961年から観光開発を目指したが、国立公園の規制や1970年代からの経済の低迷により計画を断念した（古川2010：94）。

1970年から教育文化施設を島の中心部に集めた「文教地区計画」による整備が始まり、石井和紘の設計により各種学校が建設され、その後役場、福祉センターや港施設なども有名な建築家の設計で完成し、「文化ゾーン」の評価を高めている（直島町2013）。

このような背景を踏まえ、1980年代から直島は観光リゾート地への変換に動き出した。いくつかの取り組みの中で、ベネッセコーポレーション（前身は福武書店、以下ベネッセ）が主導して行ったものが大きいと言えよう。1985年、直島三宅町長の「清潔な観光」と福武書店福武哲彦社長の「自然と触れ合う体験」構想が意気投合したことがきっかけだと言われている。1988年に福武総一郎氏（福武哲弘氏の息子）は「直島文化村」構想を発表し、島の南部エリアを始め、総合的な観光開発を着手した。第1表に示したように、直島国際キャンプ場の建設から、ホテルと美術館を合体したベネッセハウス、本村地区で展開された家プロジェクト、地中美術館、犬島アートプロジェクトの完成まで、アートを用いて20年をかけた文化・リゾートエリアが直島に誕生し、プロジェクトはその周辺の島にも広がった。

一方、ベネッセの活動は多くの雑誌や論文に評価された。JABS・建築雑誌（2010年8月号）によると、「ベネッセアート直島」は、瀬戸内海の島を舞台とし、建築と現代アートによる地域振興を目指すものであり、島全体にわたる現代アートの展覧会の開催などにより、島の活性化に大きく貢献してきた。さらに地域の公共的な性格をもつ観光拠点施設「ベネッセハウス」が広く活用されるようになっている。また、井原（2007）によれば、直島における芸術文化事業は当初の枠を超え、特に1999年から2002年に実施した「家プロジェクト」以降は地域社会との関係を積極的に構築しつつ、ユニークな地域づくりとしての側面も併せ持ちながら拡大してきたことが指摘できる。

アート・ツーリズムを中心としたリゾート開発の結果を見ると、第1図のように観光者数が増加してきた。全体的にみると人数がかなり急激に増えており、直島観光の迅速な発展が明らかになっている。1992年にベネッセハウスの建設が完了したが、訪問する人はそれほど増えずに低迷していた。2001年に「スタンダード展」が開催し、多くの観光者を誘致することができ、そこから右肩上りとなった。1990年から2003年まで直島への入り込み数は5万人にも満たなかったが、2004年に一気に10万人以上に伸びた。これは地中美術館の完成によると推測できる。その後訪問者数が6年間も飛躍的に伸びた。2007年に家プロジェ



第1図：直島への観光者入込数の推移（1990-2011年）

第1表：ベネッセアートサイト直島の主な事業の推移
出典：ベネッセアートサイト直島 http://www.benesse-artsite.jp/about/history.html（2013.10.01）

年	主な出来事
1989	直島国際キャンプ場シーサイドパーク完成
1990	
1991	
1992	ベネッセハウス完成
1993	
1994	Open Air,94 Out of Bounds-海景の中の現代美術展
1995	ベネッセハウス別館「オーバル」完成
1996	
1997	家プロジェクトスタート
1998	家プロジェクト「角屋」完成
1999	家プロジェクト「南寺」完成
2000	
2001	家プロジェクト「きんざ」完成 スタンダード展開催
2002	家プロジェクト「護王神社」完成
2003	
2004	地中美術館完成；「ベネッセアートサイト直島」名称を導入
2005	
2006	ベネッセハウス「パーク」、「ビーチ」オープン； 直島スタンダード２展
2007	アートと米の収穫祭；家プロジェクト「はいしゃ、石橋、碁会 場」オープン
2008	犬島アートプロジェクト第１期完成
2009	
2010	瀬戸内国際芸術際 2010；李禹煥美術館開館；豊島美術館開館
2011	
2012	
2013	瀬戸内国際芸術際 2013

クト「はいしゃ、石橋、碁会 場」がオープンし、285,093人の小ピークを迎え、さらに2010年には「瀬戸内国際芸術祭2010」の開催により637,376人で最高となった。2011年に人数が40万台に急落し、それには東日本大震災も影響したと考えられる。正確な数値がまだないが、2012年に直島に訪れる人は再び増え、回復してきている。このように、直島を訪れる観光者の推移は少しずつ拡大されてきたベネッセの事業に大きく影響を受け、新しい開発やプロジェクトが実施されるたびに集客を増やしてきた。

2）研究方法

本研究の現地調査では2012年11月に直島町観光協会、直島文化村ベネッセハウスに聞き取り調査を行った。また、2012年11月24-25日に観光者（和文・英文）、観光産業施設、住民という3つのグループを対象にアンケートを実施した。アンケートでは3グループそれぞれに共通する項目と個別の項目を作成した。回答者数は観光者255人（うち英文回答者14人）、観光産業施設40ヶ所、住民34人であった。観光産業施設は2012年11月現在、直島観光協会が提供する直島エリアマップに記載

されている合計76施設の56％に当たり、充分な割合に足している。一方住民の回答割合は2012年4月人口3,223人に対し1％に過ぎず、今後の調査参考にする程度に止まったので、共通項目の結果の一部のみ紹介する。

観光者のアンケートでは「旅行について重視すること」と「直島の印象」について5段階の評価を求め、その平均地を出した。その値が男女、年齢層（10･20代とその他）､同行者（友人とその他）、今回の旅行目的（アートとその他）によって有意な差を示すかどうかをt検定により確認した。

３．先行研究にみるアート・ツーリズムと直島

直島の観光に関わる先行研究は、「アート･ツーリズムとして直島が事例となるもの」と、「直島を観光発展の成功事例として取り上げるもの」の2つに大別される。また、観光者数が急増した2006年以降の研究が多いという特徴がみられる。

古川（2011）は観光地として発展している直島において、大学という教育機関が地域貢献、学生の教育の場として直島で活動を行った効果について述べている。土屋他（2009）は、元気な高齢者のライフスタイルを把握する聞き取り調査を、自然と現代アートが両方存在する直島において行い、他の島との比較から直島のライフスタイルの特徴を述べている。その中では、直島の高齢者は現在の住まいに満足し、安心して暮らしている一方、観光地として外国人観光者が来島する急激な変化に対応ができない高齢者も存在するという結果を示した。原・小西（2010）は、直島に移住した若者への聞き取り調査を行っている。移住は地域の過疎化を食い止め、地域活性化の起爆剤となると考えられており、直島を事例として移住の理由を明らかにした。直島への移住の理由は従来の自然志向や田舎暮らしだけではなく、アートの魅力に魅かれて移住したことが明らかになった。

アート作品が存在する直島に関しては、地域貢献のための大学教育機関からの注目、また高齢者のライフスタイルを注視する視点、また、移住の理由を探る視点など、多くの分野からの注目度が高いことが先行研究からうかがえる。

また、「直島を観光発展の成功事例として取り上げるもの」として、長畑・枝廣（2010）は、1990年代から現代アートを活用した地域再生の取り組みを事例として現代アートによる地域の再生の成功要因について述べている。福武氏へのヒアリングと現地調査に基づき、成功の要因はアートの有効性、リーダーシップの人材、活動資金の重要性、産学官民のネットワークの重要性、世界発信を基本とした広報という要因を導き出した。

井原（2007）は､芸術文化事業が地域資源の活用･保全にもたらす効果に注目し、その事業展開が行われた直島、生口島、下蒲刈島において事業がもたらした効果の実態を明らかにした。直島と生口島は島民による事業の受容と保全再生の動きが連動していた結果から、事業の評価を行う上では、事業内容やコンセプトの優劣のみならず、いかなる形で住民に事業が受容されているか、かれらの日常に溶け込んでいるかという点に注目すべきだと述べた。また加藤 は博物館における｢音の展示｣と「音による環境づくり」の規範を導くため直島を事例として研究した。

また、前田（2012）も直島のアートプロジェクトの成功要因と今後の課題を次のように述べている。成功要因として、福武氏のリーダーシップや、直島独特のサイトスペシフィックアートを取り入れたこと、直島建造群 によりすでに1970年代から斬新な建築物（直島小学校など）が建築され、島民にモダンな建築物を受け入れる感覚的な下地ができていたこと、作品制作に住民の参加を求めたことがあげられるという。また課題としては、より利便性が良いアクセスルートの構築、美術館入場料の価格設定、直島への観光者が増える中での宿泊における収容人数の適正化などを述べている。

このように直島を観光発展の成功事例として取り上げる先行研究では、その成功の要因や、事業評価方法への注目、また独特なアート取り組み事例として直島は注目されている。観光のみならず博物館の展示という点からも注目が集まっていることがわかった。一方、観光地としての発展とその要因の説明に留まる研究が多く、観光者の分析や、ベネッセと直島町以外島内で観光の主体とな

る組織や人物についての分析などは行われていない。そこで本研究は「観光者」と「観光産業」に注目し、分析をすすめることとした。

４．観光者の特徴

以下、観光者アンケートの結果をまとめる。観光者の特徴としては女性が多く（67.1%）、20代が半分以上（55.3%）占めていることが上げられる。居住地は近畿（31.4%）と関東（22.4%）の合計で半分を占め、大都市圏からの観光者が目立っている。海外からはヨーロッパからの回答者が最も多く、ドイツ語圏（ドイツ、スイス、オーストリア）4人、フランス人2人、オランダ人１人となっている。その他、韓国人3人、オーストラリア人2人（うち1人中国在住）、アメリカ合衆国1名、ブラジル在住日本人1人の回答者がいた。この数少ないサンプルでも、外国人観光者の場合国籍と居住地が異なっている場合があり、両方を把握する必要性が明らかになる。

同行者は、友人知人と訪れる観光者が56.9%で最多であり、次に家族が34.9%と多い。数は多くないが一人旅の中にはリピーターとなって何度も直島に訪れている人もいる。友人で訪れる人は20代に77.3%で特に多く、一方、50代（95.5%）と60代（84.6%）が家族で旅行する割合が高く、いずれもカイ二乗検定で0.01水準での有意差を認められた。

また、旅行日程では日帰りが37.6%、一泊が34.1%を占めており、ほとんどの観光者が2泊未満の短期旅行であるが、「日帰り」と答えた場合、直島外で一泊し、直島を日帰りで訪れた可能性もある。

直島のことを知る情報源としては友人・知人・家族からの口コミが65.9%で圧倒的に多く、インターネット（HPなど）18.4%、美術・建築の専門雑誌12.5%、「以前に来たことがある」12.5%と続く。50代以上は24.4%と新聞・雑誌の利用率が高く（0.01水準での有意）、10・20代は友人に頼る確率が71.5%と高い（0.05水準での有意）。若い訪問者が多いため、SNSなどを通じた口コミが増え、旅行雑誌などの役割が低くなっていると思われる。なお、直島への訪問回数は初めて訪れた回答者が81.2%である。

直島を訪れた主な目的としては、アートが60.4%と高く、直島が現代アートの観光地として浸透していることがわかる。次いで多い「島に行きたかった」（5.1%）、「自然風景」（3.1%）などから自然志向が人気の一端を担っていると推測できる。ただし、この設問は間違って複数回答をした人が多く、そのため、無効回答を含めた「無回答」が21.6%にも上る。アートを目的にあげた人は60代（78.6%）と10代（70.0%）、または女性（64.3%）に高いが、有意な差ではない。

以上の回答をまとめると、直島を訪れる観光者が年齢の若い層、女性が多く、都市圏から友人と共にアートを目的とする人が多い。ただし、アンケートの協力を求めた際、カップルやグループの場合全員の回答を依頼したが、特にカップルの場合女性のみ答えるという傾向が強く、そこから女性が多い結果に繋がったことも考えられる。なお、同行者としてだけではなく、情報源としての友人・知人の口コミも重要であるといえる。

５．旅行と直島についての考え

この節では、観光者の旅行についての好み、直島の印象と訪問の満足、そして生活におけるアートや建築への関心という、観光者の考えをまとめる。

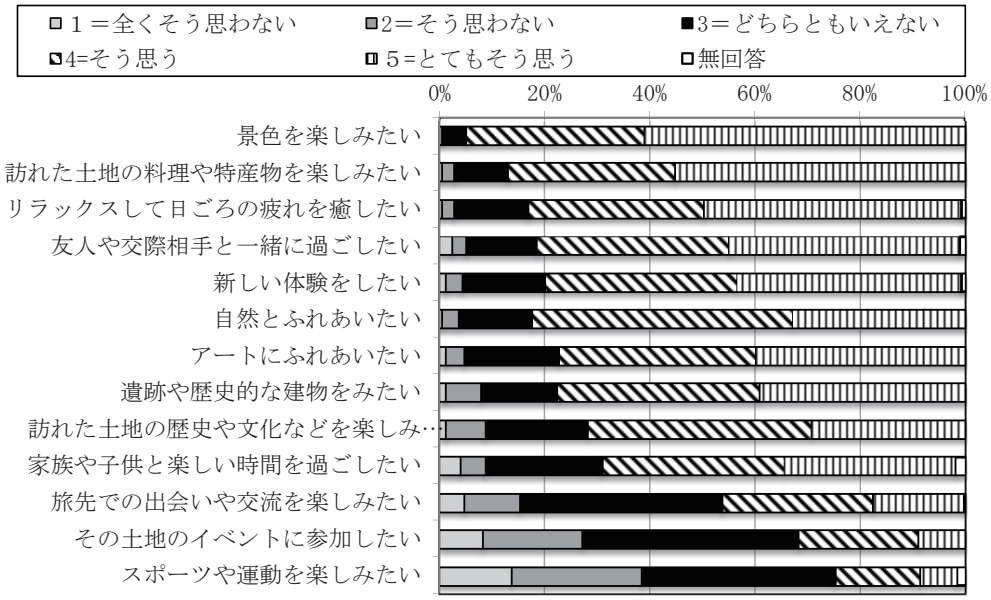
今回に限らず旅行において重視することと、直島のイメージについて「５＝とてもそう思う」から「１＝まったくそう思わない」までの五段階評価で回答をもとめ、その平均値について男女別、年齢層別（20代とその他）、同行者別（友人とその他）、目的（アートとその他）にt検定を行った。

旅行において特に重視していることについて13個の項目を設けた（第2図）。結果、「景色を楽しみたい」（平均値4.56）、「訪れた土地の料理と特産品を楽しみたい」（4.39）、「リラックスして日ごろの疲れを癒したい」（4.29）、「友人や交際相手と一緒に過ごしたい」（4.18）、「新しい体験をしたい」（4.17）ことが特に重視され、逆に「アートにふれあいたい」（4.11）ことが6位にとどまる。

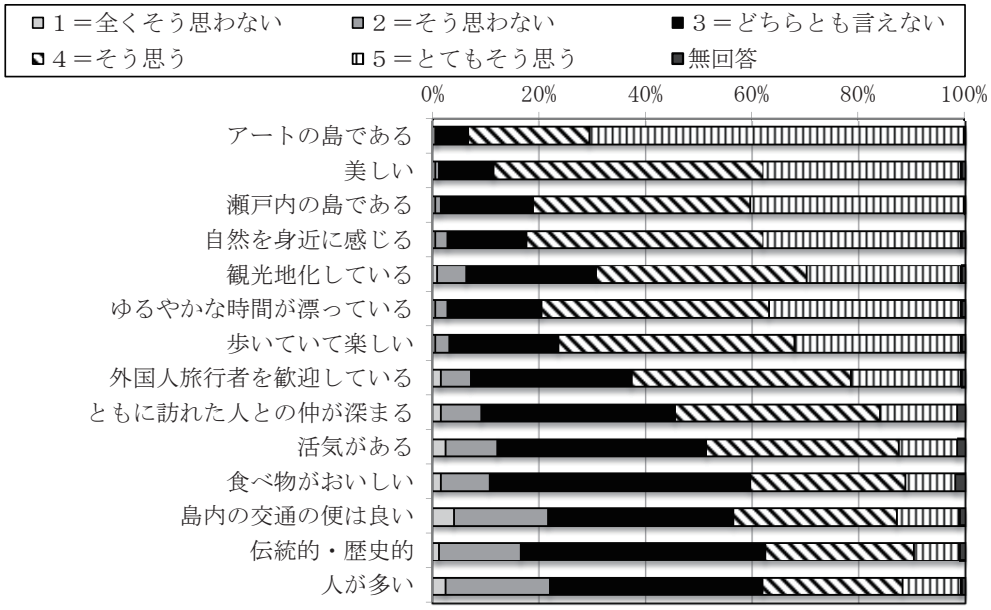
平均値の検討を行った結果、3つの項目につい

て7つの有意差が確認できた。「景色を楽しみたい」は女性の平均値が高い一方、アートを目的として訪れている観光者の平均値が低い。「アートにふれあいたい」の平均値は同行者が友人でない、年齢層が20代以上、訪問目的がアートである回答者で高い。一方、友人と交際相手と一緒に時間を過ごしたい傾向が若い人や友人と一緒に訪れている人に強い。若い訪問者は直島において訪れた相手と楽しい時間を過ごし、それ以外の年齢層がアートそのものに関心を持っているといえよう。

直島の印象について、14項目をあげ、5段階評価を求めた（第3図）。「アートの島である」（平均値4.63)、「美しい」(4.25)、「瀬戸内海の島である」(4.19)、「自然を身近に感じられる」(4.17) 場所として認識されていることがわかる。逆に「活気がある」(3.44)、「食べ物がおいしい」(3.36)、「伝統的」(3.28) などの印象を受ける人が全体の半数以下であることから、直島は「アート」と「自然」



第2図：観光者が旅行において重視すること（アンケート調査結果より）



第3図：観光者の直島の印象（アンケート調査結果より）

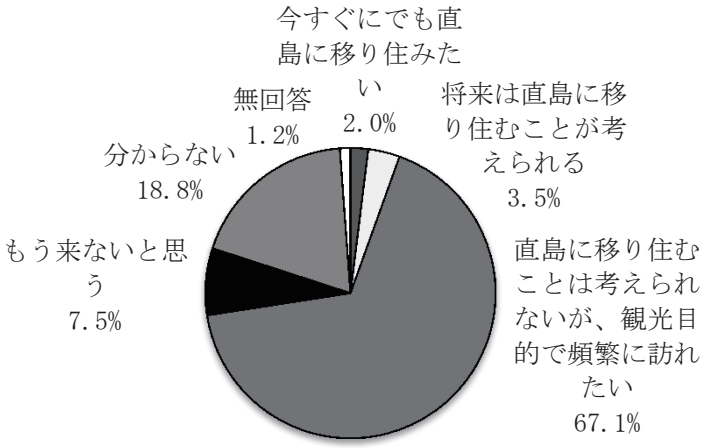
に特化した観光地であるといえる。また、「観光地化している」印象がやや強い（4.13）一方で、「人が多い」という項目の平均値が最も低い（3.24）。調査を行った週末は11月の連休で、天気もよく、貸し自転車の利用状況やバスを待つ人の数、フェリーの利用者からみるとかなり観光者が多かったが、島に分散するため、彼らは「多い」ように感じないようである。しかし、「島内の交通の便は良い」という、実用的な項目の平均値が3.29と低く、島内の交通問題が観光者に悪い印象を与えているといえる。

平均値の検討を行った結果、4つの項目において6つの有意差が確認できた。「歩いていて楽しい」と答えた割合は女性、友人と訪れた人、または10・20代に高い。「自然を身近に感じる」人も、「ともに訪れた人との仲が深まる」ように感じる人も共に女性に多く、「島内の交通の便は良い」と思う回答者は、友人以外と訪れている観光者に多い。

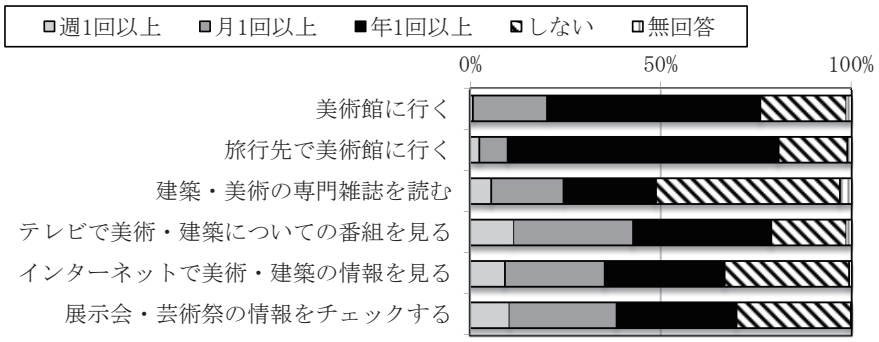
なお、特に印象に残った場所について自由回答で尋ねたが、地中美術館が36.1%で最も多く、直島の観光における中心的な役割を果たしていることがわかる。2位は14.9%で家プロジェクトであった。

直島を訪れた満足度は「大変満足した」、「満足した」の評価を合わせると89.4%にも上り、平均値も4.3と高い。

また、訪問者としての満足だけではなく、直島への関心が将来の定住に繋がるかどうかを検討するため、「直島についてどのように感じるか」ということも質問した（第4図）。その結果、全体の67.1%が「直島に移り住むことは考えられないが、観光目的で頻繁に訪れたい」を選択している。また、「移り住みたい」あるいは「将来移り住むことが考えられる」を選択した回答者が5.5%にとどまることから、直島は実際に住む場所としてではなく、あくまでも観光地として、多くの観光者に認識されていることがわかる。



第4図：観光者が直島について感じること



第5図：美術と建築に対する関心（観光者）

美術や建築への関心を確かめるために、美術館を訪れる頻度などを確かめた（第5図）。その結果をみると、週１回以上行う活動では、「テレビで美術･建築についての番組を見る」こと（11.4%）､「展示会･芸術祭の情報をチェックする」こと（10.2%）、「インターネットで美術・建築の情報を見る」こと（9.0%）が上位を占め、情報を頻繁に確認する観光者数は1割ほどにとどまる。月1回以上の活動も同じ項目の割合が高く、情報収集を月1回以上行う回答者は3分の1弱である。年1回以上となると、実際に行動を起こすような美術館の訪問（56.1%）や旅先での美術館の訪問（71.5）が増える。一方、購入する必要がある建築・美術の専門雑誌を全く読まない回答者が半数近く（48.2%）にもなり、気軽に得られるテレビやインターネットの情報を優先していることがわかる。なお、すべての項目において有意ではないが、10・20代の若い回答者はすべての項目に対して「しない」と答えた割合が高く、美術・建築に対する関心は30代以上のほうが積極的であるといえよう。

外国人回答者の人数が少なかったため、ここでは詳しい分析をしないが、主な結果だけまとめると、まず旅行で重視することが異なっている。平均値をみると新しい体験をすること、歴史や文化に関することが重視され、そこは日本人観光者と異なっている。「アートに触れ合いたい」という項目は第８位にランクされ、あまり重要視されていないことがわかる。直島の印象（平均値）から、直島がアートの島であるという印象はもっとも強いが、瀬戸内の島であるという印象は全体の回答者と異なり､あまり持たれていないことがわかる。「外国人旅行者を歓迎している」という項目が中位にランクされていることは、今後の直島の外国人観光者誘致に向けての課題である。実際、調査中に、外国人観光者が目的地に行く交通手段がわからず困っている状態を目にした。

簡単にまとめると、直島を訪れる観光者は旅行で自然や景観、土地の料理と特産物を楽しむこと、リラックスして相手とゆっくりした時間を過ごすことを大切にしているが､30代以上の人では、旅行全体でもアートが重視されている。直島の印象はアートの島、美しいところ、瀬戸内海の島としてのイメージが強いが、10・20代の観光者や女性には歩くことを楽しむ、ともに訪れた相手との仲が深まるようなことも重要である。生活の中ではアートについてテレビやインターネットで情報を見ているが、実際に美術館などを訪れるのが年1回以上程度である。

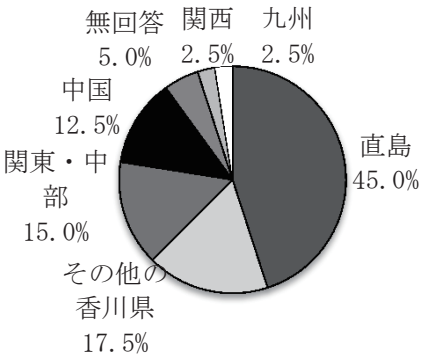
６．観光産業従事者と住民

観光産業従事者の回答者を施設立地場所別に見ると宮之浦周辺14件､本村周辺17件､積浦周辺7件、その他2件から回答を得た。

産業施設の種類は飲食店16件、宿泊施設10件、日常生活用品6件、その他5件、土産品店3件合計40件であった。当時（2012年11月）に利用した直島エリアマップには施設の種類として宿泊施設34軒（一部食事を含む）、食事場所23軒、買い物14軒、その他5軒と記載されていたからも直島では土産品店が少ないことがうかがえる。なお、一部観光者による利用が少なく、一般商業施設も調査対象に含めたが、ここでは「観光産業施設」としてまとめる。

回答者は女性が70.0%、60代とそれ以上が47.5%で、観光産業には女性、中高齢者が多く従事していることがわかる。20・30代は22.5%にとどまる。

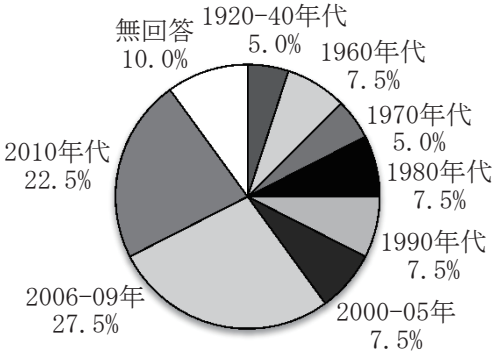
第6図をみると、回答者の45.0%が直島出身で、そのほかの香川県出身者を合わせると過半数を超える。しかし、32.5%が他の地域から移住しており、移住者が直島の観光産業に重要な役割を果たしているといえよう。



第6図：観光産業従事者の出身地

出身が直島の人が多かったためか、50年近く前から住んでいる人が過半数を超えている。一方で2000年以降住み始めた人も27.5%を占めている。しかし1970年代から1990年代にかけて住み始めた人は合わせても12.5%程度しか存在しない。したがって、移り住んでくる時期は一定の期間に集中しているといえる。これは、近年、観光地としての直島の知名度が普及し、観光産業が急速に発展しているためであると考えられる。

開業した年をみると（第7図）その様子はより明確である。過半数の施設は2005年以降開業していた。つまり、観光者の推移（第1図）にもみられたように、2004年の地中美術館開館が直島の観光産業に強い影響を与えたといえよう。一方1980年代、1990年代、2000年から2005年の開業はいずれも7.5%にとどまり、2005年までの直島の観光産業が比較的ゆるやかに発展したことがわかる。回答者年齢と開業年の関係をみると、2004年までに開業した施設のうち回答者の86.7%が50代以上で、2005年以降に開業した施設の場合では52.4%が40代以下と、地中美術館開館後は明らかに観光産業に若い人が関わるようになった。また、直島外出身者が経営する施設も2004年まで開業した施設の33.3%から2005年以降の52.4%に増え、島外からの移住が目立つようになる。移住者と年齢の関係もみられ、移住者の内半分が40代以下と若く、直島出身のうちその割合が11.1%にとどまっている。つまり、地中美術館開館以来、島外から若い人が移住し、島の観光産業に関わるようになっているといえる。



第7図：開業した年代

第2表：各客層の割合（10に対する割合）

	割合平均	最大割合	最小割合	無回答数
外国人	2.2	5	0	4
日本人	7.6	10	3	
島民	2.6	10	0	4
観光客	7.4	10	0	
男	3.9	7	0	4
女	6	10	3	

各施設の客層の内訳について、割合を尋ねた。それぞれの割合は第2表の通りである。日本人の利用率が高い。最も外国人の割合が高い施設でも5割程度であったが、全ての客が日本人であるという施設もある。外国人旅行者の多い飛騨高山市でも同様の調査を行ったが、外国人割合の平均が3割弱で、最大8割であった（Funck 2012）。高山市に比べると直島の国際化はまだ進んでいないといえよう。なお、外国訪問者の内訳をみると、多くの施設で１位となったのは英語圏であり、その他のヨーロッパ語圏、韓国語圏と続き、中国語圏は比較的少ない。

対象施設は宿泊施設など観光者向けの店が多いこともあり、島民の利用者は少ない。全てが観光者、全てが島民という施設もあり、観光者と島民が利用する施設が二分されている状況がうかがえる。女性の利用率が高く、女性のみという施設もあり、観光者の回答でみられたように、直島は女性に人気の観光地といえる。なお、これらの利用者の内訳についての情報は回答者の印象であり、正確な数値ではないということを注意しておく。

観光者へのサービスで最も多く行われているのはHP（ホームページ）、パンフレットなどへの掲載が大半（45.0%）を占めている。またHPを通じての予約システムを導入している所も多い（32.5%）。一方、クレジットカード・小切手の利用ができる店は少ない（2.5%）。

外国人に特化したサービスとしては外国語版のメニューや表記（32.5%）や、簡単な外国語でのコミュニケーションを取っている施設が多い（30.0%）（第8図）。また、雇用においても外国語が利用出来る人を雇うという店も少なくない（17.5%）。外国人版のホームページやパンフの作

成（12.5%）や、外国語の観光ガイドブックに載せる努力をする（10.0%）という、積極的に外国人旅行者を誘致する施設は全体の1割程度である。

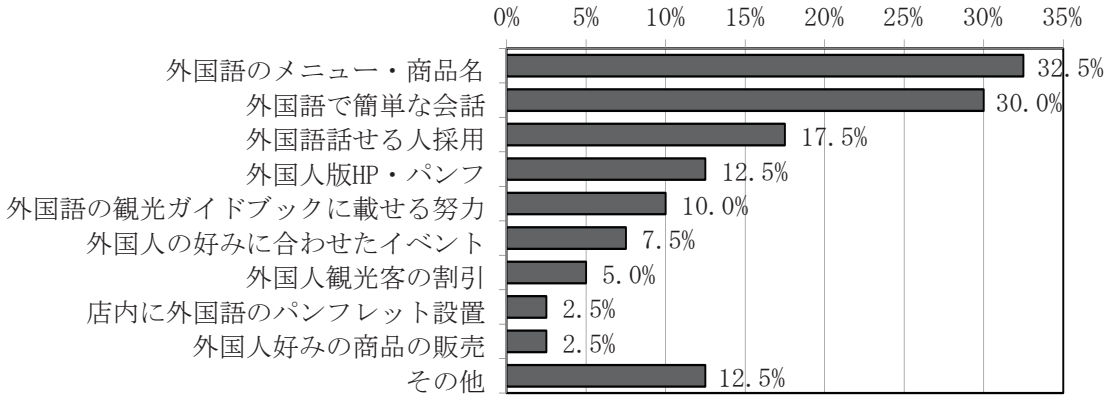
他の観光団体・施設などの連携協力については回答事業の78.0%が直島観光協会と連携している。ベネッセは直島の観光に大きな影響を与えてきたと思われるが、実際にベネッセと連携していると答えた施設は旅行業者と連携している割合と同じく、28.0%にとどまっている。観光協会やベネッセという大きい組織ではなく、宿泊施設（31.0%）や、他の個人商店（23.0%）と連携協力しているという、個人的なネットワークを重視する施設もある。

観光産業を始めた時の、直島の観光に関する心境を尋ねた問いに対し、「期待していた」、「まあ期待していた」という意見を合わせると51.2%で過半数となっている。「わからない」と答えた人も30.8%と多く、逆に不安を感じた回答者が15.4%と少ない。このことから直島における観光の発展を期待し、事業を始めた背景がうかがえる。

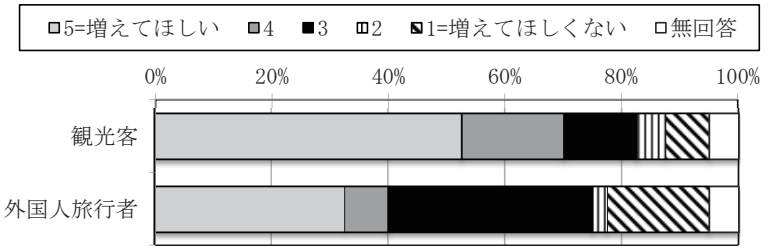
観光地化による主な利点としては、80.0%が「島がにぎやかになった」ことをあげている。その次に、観光者との交流が増えたこと（45.0%）や収入の増加（25.0%）を重視している。この順番からは個人的な利益よりも、島全体の雰囲気や、島外の人との交流が大切と読みとれる。なお、参考のために住民があげた回答をみると、2位から島がきれいになった、結束が強まった、交通が良くなったという、島での生活に関連する利点をあげている。

観光地化したことによる不利益としては、観光者のマナーに関するものが多く、特に「ゴミが増えた」（42.5%）、「治安が悪化した」（30.0%）、「交通環境が悪化した」（30.0%）ことが問題視されている。一方、不利益を感じない回答者が15.0%である。なお、不利益に関する意見を住民と観光産業で比較すると、住民が強く感じる住環境の悪化以外はほぼ同じ感想を持っている。

今後の観光者の増加については、一般観光者と外国人旅行者に対する意見が異なっている（第9図）。一般観光者については70.0%が「増えてほしい」、または「まあ増えてほしい」と増加を期



第8図：現在、外国人観光客むけに行っているサービス（複数回答）



第9図：今後の観光客・外国人旅行者の増加についての意見（観光産業従事者）

待しているが、外国人旅行者についてはその割合が40.0%にとどまっている。自由回答で外国人旅行者が増えてほしい理由としては、「異文化交流のため」「世界に知ってほしい」など、増えてほしくない理由としては「言葉がわからない」、「対応が難しい」などがあげられた。この結果からも、直島の国際観光地への発展はまだあまり進んでいないといえよう。

観光産業従事者は直島アートプロジェクトにどの程度関わっているのかということを把握するため、5つの項目に対してそれぞれの関与の有無の設問を設けた。「関わっていない」回答者が50.0%と最も多く、関わった人は「瀬戸内芸術祭」(20.0%)、「その他」(15.0%)、「ボランティア・ガイド」と「家プロジェクト」(それぞれ10.0%)をあげている。一部複数回答も含めているので、あまり積極的に関わっていない印象を受ける。

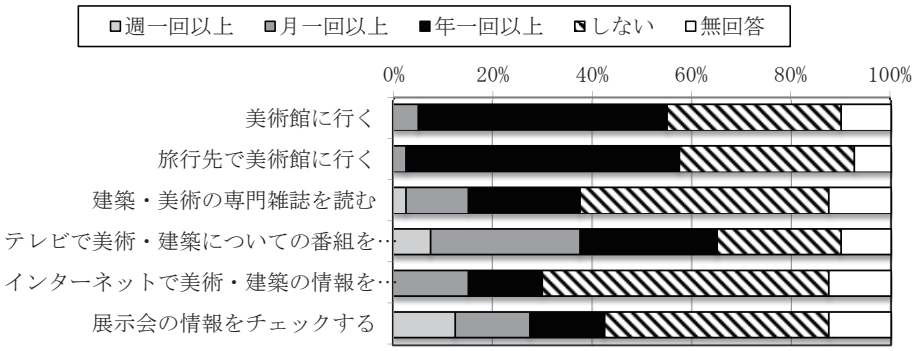
今後も直島に住み続けることについては70.0%が住み続けたいと答え、住み続けたくない人はわずか5.0%にとどまっている。

最後に観光者対象のアンケートと同様に、美術・建築に対する関心を図る問いを設定した。その結果を第10図に示したが、第5図と比べるとすべての項目において「しない」と答えた割合が高いことがわかる。しかし、観光者の場合、建築・美術の雑誌を読まない割合が48.2%で最も高いことに対し、観光産業の従事者では、インターネットで美術・建築の情報を見ない割合が57.5%で一位を占めている。ここは回答者の年齢も関係しているかもしれないが、観光者は、直島に住んでいる観光産業の従事者よりもインターネットを活用する傾向があるとみられる。

7．おわりに

本研究における調査結果を踏まえ、直島を訪れる観光者の特徴と、そしてアート・ツーリズムが島の観光産業に与えた影響について検討したい。観光者の特徴は他に瀬戸内海の島々で実施されたアンケート調査の結果に比べると、明らかに異なる（フンク2013, (3)）。特に都会から訪れる女性が多いことに特徴がみられる。直島を訪れた目的としてはアートが最も重要であるが、今回に限らず旅行で重視することとしてのアートは6位にとどまっている。上位を占める「景色を楽しみたい」と、「訪れた土地の料理と特産品を楽しみたい」は宮島で行われた調査と同様であり（フンク2013, (6)）、旅行動機の違いはみられない。年齢層別にみると、若い世代は特に友人や交際相手とゆっくり時間を過ごし、島を歩き回ることを楽しんでいるようである。性別では、女性は景色を楽しみたい傾向が強く、直島で自然を間近に感じようとする自然派が多いといえよう。美術や建築への関心については他の調査で尋ねていないため比較できないが、積極的に美術館を回り、専門雑誌を見るよりは気軽にテレビやインターネットで美術・建築について情報を得ている回答者が多い。また、若い世代は情報収集さえもあまり積極的ではない。

このように、直島を訪れる観光者は旅行全体や普段の生活でもアートに強い関心を持つ人、アートとともに自然を楽しむ人、訪れた相手とゆっく



第10図：美術と建築に対する関心（観光産業従事者）

り島を歩き回りたい人など様々であり、性別や年齢層による差もみられる。したがって他の観光地とは全く異なる客層を引きつけているというよりは、客層が拡大し、多様化しているといえよう。

観光産業については地中美術館の開館とそれに伴う観光者数の増加が影響し、2004年以降に島外からの若い人々が移住し、観光産業、特に宿泊施設に取り組む傾向が強まった。しかし、観光者向けのサービス、特に外国人旅行者に対する情報提供などはまだ限られている。外国人の増加に対してもそれほど積極的ではない観光産業従事者が多く、国際観光地としての成長はこれからの課題である。施設管理、サービス、値段や情報提供がともに高水準であるベネッセの施設に比べると、その他の観光産業は小規模で、個人的で、施設の水準があまり高くなく、そのギャップは大きい。中間レベルの観光産業が存在しないことが直島の特徴であるが、一方で小規模施設の中で強い志向を持ち、直島に移住してきた人々など、「島への強い思い」で施設やサービスの簡易さを補っている観光産業従事者も少なくない。ただし、彼等はアートに強い関心を持つ、または積極的にアートプロジェクトに関わるようなことがあまりなく、「アート」に対する思いよりも、「島」へのこだわりや、自立して事業を行いたい志向が強いようにみえる。観光産業の成長はアート・ツーリズムの魅力の効果というよりも、アート・ツーリズムを通じて観光地として成功した効果によるところが強いといえる。

付　記

本研究には、平成24年度日本学術振興会の科学研究費補助金（基盤研究（C)、課題番号22520794、研究代表：フンク・カロリン）を利用しました。アンケート調査は広島大学総合科学部の授業、2012年度後期「地域調査演習II」の一環として行ない、受講者16人、広島大学大学院総合科学研究科研究生3人が調査を実施しました。調査に当たって、直島観光協会とベネッセアートサイトから貴重な情報と全面的なご協力をいただきました。深く感謝いたします。

文　献

Funck, C. (2012): The innovative potential of inbound tourism in Japan for destination development - a case study of Hida Takayama. *Contemporary Japan* 24/2, 121-147

Klien, S. (2010): Contemporary art and regional revitalisation: selected artworks in the Echigo-Tsumari Art Triennial 2000–6. *Japan Forum* 22/3-4, 513–543

井原縁（2007）：瀬戸内海島嶼部における芸術文化事業の特徴と地域環境への影響に関する考察，ランドスケープ研究 : 日本造園学会誌，70，5，625-630

加藤修子（2008）：博物館のサウンドスケープ・デザイン : ベネッセアートサイト直島 : ケーススタディ(1)，駿河台大学文化情報学部紀要，15，11-21

国土交通省（2007）：観光立国推進基本計画. http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha07/01/010629_3_.html (2013年11月8日閲覧)

竹田茂生，陳那森（2012）:観光アートの現状と展望. 関西国際大学紀要，13，77-90

土屋房江，金田すみれ，倉田美恵，筒井由紀子，三谷璋子，山本百合子（2009）：アクティブシニアのライフスタイルの現状-その8 —香川県・直島の聞き取り調査—. 福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報，6，63-70

直島町（2013）：直島町公共施設の紹介. http://www.town.naoshima.lg.jp/about/ (2013年11月8日閲覧)

長畑実，枝廣可奈子（2010）：現代アートを活用した地域の再生・創造に関する研究−直島アートプロジェクトを事例として. 大学教育，7，131-143

原直行，小西綾子（2010）：観光のその先へ～直島に移住した若者への聞き取り調査から～ . 香川大学経済学部ツーリズム研究会『地域観光の文化と戦略』，45-63

古川尚幸（2010）：瀬戸内海島　部における地域活性化の現状と課題.香川大学経濟論叢，83（1-2），89-98

古川尚幸（2011）：大学生による地域活性化に向けた取り組みとその教育効果～「香川大学直島地域活性化プロジェクト」を事例として～. 香川大学経濟論叢，83（4），525-546

フンク・カロリン（2013）：宮島における外国人と日

本人観光者の行動. 厳島研究(=広島大学世界遺産・厳島-内海の歴史と文化プロジェクト研究センター研究成果報告書), 9, (1)-(12)

前田和實（2012）：アートの島：直島アートプロジェクトを検証する.専修大学社会科学研究所月報, 587/588, 63-71